

病氣とは何ぞや 寒冒

愈々之から病氣に就いての解説であるが、現代医学の解釈は、人体を単なる物質と見做して、唯物療法を進歩させて来た医学は、どの点に最も欠陥があるかを、順を遂うてかいてみるが、それに就いては先ず、実際の病氣を取上げて説明してみるのが、最も判り易いからそういう事にする。

先ず、人間として、何人も経験しない者のない病としては寒冒であろう。処が寒冒の原因は医学では今以て不明とされており、近来僅かに発見されたのが、ウイルスによ

る空気伝染とか、アレルギー性によるとか言はれている位で、吾等からみれば問題とするには足りない稚説である。此説も近き将来無意味とされる事は間違いないまい。

抑々、人間は先天的に種々なる毒素を保有している事は、医学でも認めている。例えば天然痘、麻疹、百日咳等は元より未知の毒素も色々あるであろう。処でそれら毒素は自然生理作用が発生し、外部へ排泄されようとする、これを吾等の方では浄化作用と言う。そうして毒素は、最初一旦人体の各局部に集溜する。其場合神経を使う処程多く集まる、人間が最も神経を使う処は、言うまでもなく、上

半身特に頭脳に近い程そうである。人間が目が醒めている間手足は休む事はあっても、頭脳を始め、目、耳、鼻、口等は一瞬の休みもない。としたら毒素集溜の場合もそうであつて、肩、頸、淋巴腺、延髄、耳下腺附近は固より、頭脳が主となっている。此様に各部に集溜した毒素は、時日を経るに従つて、漸次固結する。それが或限度に達するや、排除作用が発生する。ここに自然の恩恵を見るのである。何となれば固結の為、血行が悪くなり、肩や頸が凝り、頭痛、頭重、視力減退、耳の鈍聴、鼻詰まり、嗅覚の鈍化、齒槽膿漏、齒牙の劣弱、息切れ、手足の弛緩、腰

痛、浮腫等々により、活動力が減殺されるからで、それが為人間本来の使命が行はれない事になる。それで造物主は病氣という結構な、浄化作用を作られたのである。

右の如く、毒素排除作用の苦痛が病氣であるとしたら、病氣こそ浄血作用であり、健康上最も必要なもので、神の恩恵中最大なものというべきである。故に若し人類から、病氣を取除いたとしたら、人間は漸次弱って、遂には滅亡に到るかも知れないのである。処が私は、病なき世界を造るというのであるから矛盾するように思うであろうが、これは根本的に異っている。というのは人間が無毒になれ

ば、淨化作用の必要がなくなるから、共に病氣もなくなるのは判り切った話である。此意味に於いて私は、之から出来るだけ解り易く徹底的に説いてみよう。

話は戻るが、固結毒素の排除作用を、私は淨化作用と名付けたが、先ず初め寒冒に罹るや発熱が先駆となる。自然は固結毒素の排除を容易ならしめんが為、熱で溶解させ液体化させる。此液毒は速かに肺に侵入するが、此作用は実に神秘であつて、例えば吾等が淨靈（之は療病法の名称）によって、固結毒素を溶解するや、間髪を入れず肺臓内に侵入する。其場合筋肉でも骨でも透過して了うのである。

何より身体各局所にある固結毒素（以下毒結と称す）が、普通一、二個所位なら軽い症状で済むが、局所を増す毎に重くなる、最初軽いと思った寒冒が漸次重くなるのは、その意味である。

右の如く、液毒は迅速に肺臓内に侵入し、稀薄な場合は痰となって即時排泄されるが、濃度の場合は一時停滞し、咳というポンプ作用を待って、間もなく気管を通じて外部へ排泄される。咳の後には必ず痰が出るにみても明かであり、嚏の後に鼻汁が出るのも同様の理である。又頭痛、咽喉の痛み、中耳炎、淋巴腺炎、手足の関節や、鼠蹊腺等の

痛みは何れも其部にあつた毒結が溶解し、出口を求めようとして動き始める。それが神経を刺戟するからである。そうして液毒には濃い薄いが出来る。濃いのは喀痰、鼻汁、下痢等になるが、極く薄いのは水様となり、盗汗や尿によつて排泄される。此様に浄化作用なるものは、最も自然に合理的に行はれるもので、造物主の神技に感嘆せざるを得ないのである。一体造物主即ち神は、人間を造つておき乍ら、病気などという人間を苦しめ、活動を阻害するようなものを与えられる筈はなく、常に健康であらねばならないに拘はらず、人間が誤った考えで毒素を作り、貯溜させる

ので、止むなく排除の必要が發こる。それが病氣であるとするれば、寒冒の場合も何等の療法もせず、自然に放任しておけば完全に浄化が行はれるから順調に治り、健康は増すのである。此理によって人間は出来るだけ風邪を引くようにすべきで、そうすれば結核などという忌しい病は跡を絶つのである。

処がどうした事か、何時の頃からか不思議にも、右の清浄作用を逆解して了った、そこで発病するや極力浄化を停めようとする。何しろ浄化の苦痛を悪化の苦痛と間違へたのだから堪らない、其為熱を恐れて下げようとする。解熱

すれば毒結の溶解が停止されるから咳嗽を初め凡ゆる症状が軽減する。恰度病気が治るように見えるのである。判り易く言えば、折角溶け始めた毒結を元通り固めようとする。其固め方法が医療なのである。氷冷、湿布、薬剤、注射等すべてはそれであって、全部固まると同時に症状が消失するので、之で治ったと思って喜ぶが、何ぞ知らん、実は折角掃除をしようとする其手を抑へつけるようなもので、之は事実が証明している。よく風邪が拗れるというが、之は人体の方は浄化しようとするのを止めようとする為、つまり浄化と非浄化との摩擦となるから長引くの

である。一旦風邪が治っても、暫くすると必ず再発するのを見て分るのである。故に結果から言えば、医療とは病気を治す方法ではなく、治さないで延期させる方法という事である。従而本当に治るという事は、毒素を外部へ排泄させ、体内が清浄となつて、病気の原因が皆無となる事である。だから眞の医術とは浄化が發つた際、固結毒素をより速く溶解させ、より多く体外へ排泄させる事で、それ以外眞の療法はないのである。

右の理に対し一つの譬えをかいてみよう。即ち借金をしている場合である。段々利息も溜り、期限が来て返済を迫

られるので、一時に払うのは辛いから、外から利子の金を借りて一時凌ぎをする。すると又期限が来たので又借金して一時免れをするという工合で、元金の外に利子も段々増え、請求も厳しくなるが益々返金が出来なくなる。そこで貸主は承知せず、差押え、又は破産の訴えをするが、返済が出来ないので破産する。つまり寒冒も之と同様で、最初の返済期が来た時、苦しくとも払ってええばそれで済むものを、辛いから借金を増しても一時免れをする。それが薬を主とした医療である。従って引延ばす毎に薬毒が殖え、遂に一時に請求をされる事となる、之が肺炎である。処が

貸主も相手の支払能力を考慮し、緩慢な請求をする、之が
結核と思えばいいのである。